

「弘鴻」資料調査の始末記

ひろひろし

はじめに

徳山地方郷土史研究会三十五周年おめでとうございませう。まずもって徳山地方郷土史研究会を今日あらしめた諸先輩方のご努力に深甚なる敬意を表します。筆者は産業機器の個別受注生産企業にあつて、永らく設計・開発に従事。前に先へ！さらには、際限なき標準化をも卒業（定年）。以前に昔へ！郷土史散策をと思つていた矢先、下松市文化財調査用務を打診され受託。域内の出土品・石造物・文化財・先達・民具・農具・漁具類現況調査（アーカイブ）において、四境戦争で「伊勢暦」が入手できなくなった時「種蒔の栞」を上表した弘鴻は

会員 山 神 利 勝

徳山の羽山文哉に關流算法。大道理の田中民之丞に曆法星学を師事・修めた。とあり、本来は会誌に入らない、維新前後の激動期、直向に生きた一周南人の空襲で焼失した一次資料は望むべくもなく、二次・三次資料から事蹟の道程とその相互關係を探し求めた始末記なのです。

平成X年X月X日「弘鴻」資料調査の発端

市役所H氏から、弘鴻の子孫H氏とW弘鴻研究家両氏を紹介され、急遽、K郷土史研究家に同席いただいた。

「弘氏」の系譜と花岡における活動調査（案）

「弘鴻」の山口における活動と事蹟調査（案）

平成X年X月X日「調査第一報」の文献目録

下松市史編纂委員会「下松市史通史編」

下松市教育委員会「下松市の石造文化財」

河村蒸一郎著「下松市史異説」

山口縣都濃郡役所編 神本正律校訂「都濃郡誌」

花岡小学校「花岡教育誌」

吉田祥朔著「増補 近世防長人名辞典」

弘美知生著「弘鴻の生涯とその事蹟」

三上義夫著「弘鴻の数学上の事蹟並に曆法改革の意見」

「山口縣立山口高等学校百年史」



弘鴻の肖像と自作の和歌

弘鴻の肖像と自作の和歌

関伽井坊前顕彰碑（碑文は近藤清石の撰）

山口県地方史学会「山口県地方史研究者事典」

山口県編「防長歴史暦」歴史図書社

山口県文書館編「萩藩閥閥録」

萩郷土文化研究会編「萩藩分限帳」

樹下明紀・田村哲夫編「萩藩給禄帳」

「県立山口図書館年報」第23号

平成X年X月X日「調査第二報」の概要

「長州閥の教育戦略 近代日本の進学教育の黎明」には、毛利敬親は、天保十一年（一八四〇）藩主として初入国

した時、明倫館に文武の師家を集めて訓示をしている

。明倫館は公用に役立つ人材を養成するところである。

学校の興廢は人材の質にかかっている、人員の量ではない。諸士が養育の子をして明倫館に学ばせるのは自由で

あるが、その場合、才器能力のあることが条件で、身分

の貴賤を問わない。いろいろ言いわけをつけて、名利のために凡器を養うことをここでは許されないとある。

参考文献・執筆・上田芳江

監修・三坂圭治「福原越後」

平成X年X月X日「調査第三報」+「調査第八報」

W弘鴻研究家・平成X年X月X日書信（質問）に対する

K郷土史研究家からの事例回答（項目）

*「弘 八右衛門は藩士なのか!？」

*「庶民戒名に居士・大姉を許されたのは明治十三年

（一八八〇）」

*「門構えの家は封建時代にあつては家格を意味した」

*「庄屋・畔頭から小百姓へ」

*質問のあつた参考文献の目録

時山弥八著「もりのしげり」

末松謙澄著「防長回天史」

山口県文書館編「防長風土注進案」

山口県文書館編「山口県風土誌」

岸浩編著「毛利氏八箇国御時代分限帳」（調査第八報）

（蔵入 石・斗升合）（姓 名）（知 行）

二三〇・七三〇 弘九郎左衛門 備後・周防

五七・四〇九 弘六郎右衛門 安芸・周防・備後

一一・三七七 弘新三郎 安芸・周防

二四・三四四 弘平右衛門 安芸

七・九七〇 弘神六 安芸

四・八〇五 弘木工助 安芸

弘氏は、備後・安芸・周防国に六家記されている。

山口県文書館編「萩藩閥閥録」樹下明紀・田村哲夫編「萩藩給禄帳」には「大組」の四家、「鷹匠」の二家、「無給通」の一家が記されている。

萩郷土文化研究会編「萩藩分限帳」には「大組」の四家、「無給」の一家、「御鷹匠」の一家が記されている。

林茂香著「萩城下見聞録」には、萩の士には寄組、大組、遠近、無給などと云う階級。足軽の方にも足軽、組の者と云う区別が あつたと紹介している。

田村哲夫編「防長維新関係者要覧」には、弘鴻初鴻之充 号尋石 都濃郡花岡御番所 監守 八右衛門 嫡子 亀太郎・忠助・一太郎 明倫館助教・日文舎塾主

明治三十六年（一九〇三）一月九日 山口に病死 神福寺（墓）と紹介されている。

平成X年X月X日「調査第四報」の文献目録

矢野太郎（國史研究会蔵版）編「芸侯三家誌 付吉田物語」

石川敦彦著「萩藩戸籍制度と戸口統計」

平成X年X月X日「調査第五報」＋「調査第八報」

石川敦彦著「萩藩職役人名辞典」（調査第八報）

（職役人名）（任命年月日）（役職）

弘助兵衛定成 正保頃 山代代官

弘甚兵衛就定 明暦元年七月 矢倉方

弘甚兵衛就定 明暦四年五月 矢倉方

弘甚兵衛就定 寛文二年 矢倉方

弘六左衛門 延宝二年四月一日 通浦船究役

弘仁左衛門 延宝八年 都濃代官（花岡）

弘忠兵衛 貞享元年 先大津宰判算用方

弘七郎右衛門 元禄五年 熊毛宰判天下御物送寺社方

弘九郎左衛門 元禄十三年 材木方請渡檢使

弘勘七 享保四年 家具方請渡檢使

弘勘七 享保十四年六月九日 家具方請渡檢使再役

弘甚左衛門信易 延享二年一月十五日 御駕奉行請渡

弘久五郎忠福 延享四年八月四日 後六郎右衛門銀冶方

弘市郎左衛門 宝暦三年 徳地宰判御紙見取方・御普請方

弘九郎左衛門忠方 宝暦五年三月二十八日 濃物方請渡檢

弘六郎右衛門 宝暦五年三月二十八日 初久五郎細工檢

弘甚左衛門信易 宝暦十二年二月二十一日 御駕奉行

弘六郎右衛門忠福 宝暦十二年十月五日 重就公御判物方

弘六郎右衛門忠福 宝暦十三年三月十四日 洞春寺御祈祷

弘六郎右衛門忠福 明和元年十月十八日 八組証人

弘甚左衛門信易 明和七年七月三日 明倫館判事役

弘甚左衛門信易 明和九年十一月十七日 肥中浦船究役

弘六郎右衛門忠福 安永七年五月十五日 蔵元檢使

弘六郎右衛門忠福 安永七年十二月十六日 治親公御前様

弘小文太信克 天明七年 若殿様御駕奉行

弘小文太信克 寛政三年七月二十九日 御家督以後御表

弘六郎右衛門 寛政三年七月二十一日 御用紙方請渡検使

弘三郎兵衛一則 寛政四年閏二月十八日 御鳥部屋頭人並

弘六郎右衛門 寛政四年三月十四日 洞春寺御祈祷御賄方

弘小文太信克 寛政八年七月二十四日 御駕奉行

弘五左衛門 寛政八年四月二十一日 御献上脊膺撰立検使

弘新兵衛忠道 文化元年四月十八日 蔵元検使暫役

弘新兵衛忠道 文化元年七月十八日 蔵元検使本役

弘新兵衛忠道 文化三年八月九日 御作事方検使

弘甚五郎定尚 文化十一年十二月三日 後耕治江戸御奏者

弘甚五郎耕治 嘉永三年九月二十四日 八組証人

弘三郎兵衛 安政二年八月晦日 御鳥部屋御用掛

弘平五郎 安政五年七月二十八日 御右筆並唐船方筆者座

弘永之進 万延元年十月二十七日 文学掛

弘詠之進 元治元年四月二十七日 肥中浦船究役

平成X年X月X日「調査第六報」の概要

弘鴻の文献調査で判明したことを列記すると、毛利氏八箇国時代、備後から安芸・周防国にかけて、弘氏は六

家数えることが出来る（詳細は第三報）。

関ヶ原の後、萩藩時代の太組・他、弘氏は六家数えることが出来る（全容は第三報）。

維新前後の弘鴻については、調査第三報の通り。なお、弘氏の役職については、調査第八報にて詳述。

石川敦彦編「萩藩職役人名辞典」には、都濃宰判、都濃代官 弘 仁左衛門 延宝八年 都濃代官 天和二年」と記されている（詳細は第五報）。

郷土史誌には、都濃宰判花岡代官 弘八右衛門の子 鴻について、生年、文政十二年（一八二九）と事蹟。没年、明治三十六年（一九〇三）と記している。

弘鴻が上表した「略暦」当時の暦は、天保暦（太陰太陽暦。因みに、現在、明治五年（一八七二）以前の旧暦計算は天保暦をもとにして行われている）。

内田正男著「暦の語る日本の歴史」には、貞享改暦以降の暦発行手順（朝廷と幕府）について紹介している。

弘鴻が教鞭を執った藩校・明倫館は、執筆・上田芳江 監修・三坂圭治「福原越後」で紹介した（第二報）。

ここでは、萩藩水代家老二家の（須佐の益田氏と宇部の福原氏）福原氏について、元和三年（一六一七）毛利輝元は、就隆に下松を中心に都濃郡の過半三万石を分知した。支藩下松藩の創設である。下松藩と呼ぶのは、この支藩領の中心が下松にあり、何よりもその館（陣屋、屋敷ともいう）が当初下松にあったからである。支藩庁の徳山移転は慶安三年（一六五〇）に野上に移転して、地名を徳山と改め徳山藩となった。なお、福原氏は周防の玖珂、熊毛、都濃にも知行があり、下松藩分知にもなって河内村を手離し、さらに富海村を手離すことになり、後に宇部に知行替えとなり、常磐湖を開作したとも伝わる。なお、来卷村の万願寺（光重師）は廃寺となり、熊毛郡浅江村（現光市）の祇園寺（深月院二十七世愚鏡師）に引寺され、梵鐘は、同じく浅江村の満願寺で往時を偲ばせている。

顕彰碑・他について

弘鴻の国学の師「近藤清石」の撰になる碑文（花岡八

幡宮の参道の横、閑伽井坊前広場の石碑（全容は第一報）碑文を抜粋・引用すると、萩藩花岡邸番所役 八右衛門の子として生まれ（文政十二年（一八二九）、幼名は忠助、後に鴻。慶応二年（一八六六）、幕府の第二次征長戦争で周防、長門は四境を封鎖され、農漁業に欠かせない伊勢大神宮の伊勢曆が入手できず、略曆「種蒔の栞」を推考・上表、藩から頒布されました。教育者としての弘鴻は、慶応二年（一八六六）、山口明倫館の助教授に召しだされ、数学を教えています。明治元年（一八六八）には、同校教授。明治六年（一八七三）には、山口中学校の教授となり、同時に山口師範学校の教授となりました。

「算法小学」「珠算新式」「詞の橋立」「量地必携」「五十連字解」「洋算例題答解」「歌集阿ら玉」他の未刊六稿本等、多数の著書があります。その他、測量機器として割田儀割方儀や視経儀も発明。明治三十六年（一九〇三）山口で病没と刻まれている。

なお「種蒔の栞」だけでは留まらず、後日談もある。維新の後、山口県権令（ごんれい）（現県知事）や明治政府（議會）に、

次々と「改暦」建議書を提出している。

因みに「山口県地方史研究者事典」によれば、「近藤清石」は、防長史実の闡明とそれに関する膨大な著述。また和歌文章にも秀で、画技や考古の趣味を有し、その考証・鑑定も正確である。(内田伸)と紹介されている。



弘鴻の顕彰碑（あかい坊前広場）

和算・暦学について

「日本書紀」には、欽明天皇の十四年（五五三）六月に内臣を百濟（当時、元嘉暦）に使いさせ、医博士、易博士、暦博士らを交替で送るように勅している。とあり、国家統治に関わる態勢作りの黎明と思われる。

測量（通信分野）・測量器具について

参考文献・弘鴻の事蹟に関わる分野を調査中

和歌について

花鳥風月を愛でる日本の詩歌。万葉仮名に始まる詩歌には「月齢」や「二十四節気」をはじめ季語や雅名も数多あり、伝承行事や農業・漁業面でも旧暦（太陰太陽暦）は、今も生活の一部と言っても過言ではありません。

参考文献・弘鴻の事蹟に関わる分野を調査中

平成X年X月X日「調査第七報」・X日「調査第八報」弘鴻子孫H氏から電話があり、ぐくだまつ ふるさと広場で面談（後、ふるさと広場T氏に紹介）。

その際、入手した資料・情報から、経緯（第一報から第六報）と、まとめ（第七報・第八報）作成（本稿）。

弘鴻子孫H氏所蔵の弘鴻資料と、次の開示があった。

弘美知生著「弘鴻の生涯とその事蹟（私家版）」

教育関係者懇話会叢書第十六 昭和三十六年一月十四日

山口学都に於ける教育功勞者「弘、伊藤両先生を偲ぶ」
第四十一回山口地方教育関係者新年懇話会

九州史学第一〇二号抜刷 一九九一年十月三十一日発行
「明治七年大分県の『上津文』献呈始末」中村和裕一幸
松本の政府呈進をめぐって一

中村和裕「上つ文はしかき」雑攷一伝来論の再検討

特別企画『上記』古史古伝事典

神道史研究家 中村和裕 平成X年X月X日書信(照会)
『上記』(「ウエツフミ」「上津文」等ともいう)幕末に大分県で発見されたもので、神代文字(研究者は「豊国文字」と呼んでいる)で全編が記された天地開闢から神武天皇あたりまでの歴史を記したもの(『古事記』の神代に当たる部分)。流布本(宗像本)で四十一冊、大友本で四十七冊と言われている。発見時期から、明治になって写本が多く作られるようになった。弘鴻が『上記』に出てくる暦法について研究されており、暦法改正が問題となっていた明治初年から十年代にかけて明治新政府に対して暦制度の建白書を何度も出しておられる。

河野通毅著「弘尋石先生伝」の逸話その一には、上記について「弘未知生氏は次の如く記されている」として「祖父の蔵書中に諺文に似た奇体の文字で記された五十数巻の筆写体があった。…後に翁の蔵書の中に吉良義風著『上記鈔訳』及び『上記徴証』なる本を見出し、この筆写文が古代文字で記された我国上代の史書であることを知った」と引用され、弘鴻「詞乃橋立」第一篇(明治十七年)にも『上記』使用の文字が紹介されている。同『五十連字解』(弘進、明治二十年)は『上記』に出てくる神代文字の解説書。弘鴻の国学の師である近藤清石が『上記』写本を所蔵し、これを写本されたと思われる。また、吉良義風著『上記鈔訳』(明治十年)全三巻と『上記徴証』(明治十三年)があり、弘鴻は明治十四年に『上記』に関して、吉良義風に私信を発信。

神道史研究家 中村和裕 平成X年X月X日書信(照会)

弘鴻の遺稿・遺品の全て昭和二十年七月二十七日の未明、徳山市街地を爆撃され焼失。吉良義風著『上記鈔訳』と『上記徴証』の写本も焼失とのこと。

弘家の菩提寺について「下松市史」は、花岡八幡宮には、中世九ヶ寺の社坊があったが、近世では地藏院と閻伽井坊の二ヶ寺が残りが、その後、地藏院は廃寺。閻伽井坊は無住。後年、三池師が入寺、住職となられた。前述、来巻村の万願寺は廃寺。門徒は総持院が継承、総持院も後年に廃寺、現閻伽井坊が継承。万願寺（奥迫）・総持院（同上）・法覚寺（大蔵）・法堂寺（中ノ迫）・誓教寺（横道）とあったが、切山村に遷った誓教寺が今日残るのみ。

弘鴻が「略暦」を上表した慶応二年（一八六六）は、藩より吉敷郡、厚狭郡の測量を命じられており、加えて、長州再征討軍が包囲（四境戦争）の最中でもありました。弘鴻の学歴は、天保十三年（一八四二）九月から花岡の松本平三郎に倭算。嘉永二年（一八四九）正月から徳山の羽山文哉に閻流算法。安政三年（一八五六）五月から大道理の田中民之丞に曆法星学。慶応三年（一八六七）二月から萩の松本源一に洋算。明治元年（一八六八）から四年（一八七二）中関医師吉本寛作に蘭学。明治四年（一八七二）から英人ラルキンに測量術。さらに近藤清石、

城村五百樹等について国学を修めた。

公職を辞してからは山口後河原に閑居して、その居を「日文舎」と称し諸生を教授した。沢山勇三郎・瀬川秀雄・柴田家門・上山満之進・近藤仁三郎・横島武二・神代兼濟・大谷新二をはじめとする門下生数百人を輩出。私立光城女学院や開導教校の嘱託教授でもありました。

あとがき

「弘鴻」資料調査の始末記と題したのは、弘美知生編「弘鴻の生涯とその事蹟」・三上義夫著「弘鴻の数学上の事蹟並に曆法改革の意見」等は、幸いにして図書館等で焼失を免れ、その他「算法小学」「珠算新式」「詞の橋立」「量地必携」「五十連字解」「洋算例題答解」「歌集阿ら玉」他の遺稿と測量機器として割円儀割方儀や視経儀の発明資料等々、徳山在住の弘鴻子孫の方が所蔵の遺品・未刊類の全て、空襲により灰燼かいじんに帰したと仄聞ひそかにしております。従って、一次資料は望むべくもなく、二次・三次資料から、焼失した遺稿に至る道程や多分野にわたる事蹟の

相互関係を焙り出すしか他に術がありませんでした。

本来、会誌の範疇に入らない、資料調査（抄録）に頁を割いていただいたのは、徳山藩府維新の群像の事蹟・遺品の多くも焼失したものと恐れ、往時の関係者の記憶の域を出ない史料も多く、周南先達の研究が急がれる所以です。本稿がその卑近な例となれば望外の幸せです。

徳山から疎開・移住、烏帽子岳（四一二m）裾野の里にて記す。

〔参考文献〕

- 山口縣都濃郡役所編「都濃郡誌」
- 弘美知生著「弘鴻の生涯とその事蹟」
- 三上義夫著「弘鴻の数学上の事蹟並に曆法改革の意見」
- 「山口縣立山口高等学校百年史」〔明治十五年山口中学校年報〕
- 山口県師範学校一等助教諭兼山口中学校一等助教諭
- 関伽井坊前顕彰碑（碑文は近藤清石の撰）
- 山口県地方史学会「山口県地方史研究者事典」
- 山口県編「防長歴史暦」
- 末弘錦江著「防長人物百年史」
- 宝城興仁著「下松のいろいろの歴史」
- 河村蒸一郎著「下松市史異説」
- 岸浩編著「毛利氏八箇国御時代分限帳」

- 樹下明紀・田村哲夫編「萩藩給祿帳」
- 萩郷土文化研究会編「萩藩分限帳」
- 田村哲夫編「防長維新関係者要覧」
- 石川敦彦編「萩藩職役人名辞典」
- 山口県文書館編「萩藩閣録」
- 岸浩編著「毛利氏八箇国御時代分限帳」
- 執筆・上田芳江監修・三坂圭治「福原越後」
- 「山口縣立山口高等学校百年史」
- 下松市史編纂委員会「下松市史 通史編」
- 「久保村郷土誌」久保村教育会
- 下松市教育委員会「下松市の石造文化財」
- 内田正男著「曆の語る日本の歴史」
- 岡田芳朗編「日本の曆」
- 中村土監修「日本の曆と和算」
- 教育関係者懇話会叢書第十六「弘、伊藤」両先生を偲ぶ